

四、社會思想・伯林留學

一八四八年の歐洲革命には、英國にチャーチストの運動が最後の火花を散らし、ドイツに青年ヘーゲル學徒や『青年ゲルマン』黨の活動があり、イタリーにマヂニ其他の指導した『青年イタリー』の愛國的革命運動が行われたが、社會思想の上から見れば、フランスは全ヨーロッパの指導的地位にいた。この年、フランスでは王政が倒壊して人民政府が成立し、社會主義者ルイ・ブラン (Louis Blanc) は政府の一員となるに至つた。ブルードン (Proudhon) や、ピエル・ルルウ (Pierre Leroux) や、ラムネー (Lamennais) や、ブシェー (Buche) の如き社會主義者が、いずれも議員に選出された。ラムネーは一八三九年に、その社會主義的論文の爲に獄に投ぜられ、サン・シモン學徒のピエル・ルルウは協同主義を鼓吹し、ルイ・ブランは一八四〇年に有名な『勞働組織論』(Organisation de Travail) を著わし、ブルードンもまた同じ年に同じく有名な『財産とは何ぞや?』(Qu'est-ce que la propriété?) を公刊して『無政府』という言葉を理

想社會を表現すべく使用した。こうした思想的激動を先驅として、一八四八年の革命は勃發したのであるから、當時の青年達が、この社會革命に於て新思想の實現されるのも近きにあると豫想したのは當然である。

當時二十歳前後の青年であつたエリイとエリゼとは、モンターバンの神學校に籍を置いた（一八四八年から四九年にかけて）この學校は官立であり政府の支配下にあつたが、青年學徒の多くは南國生れが多く、その特質として皆快活で、官學風の暗さを些かも持つていなかった。知識的の輝やきは餘り見られないにしても、日々の生活が陽氣で愉快であつた。ルクリュ兄弟は此の環境に適從して暮らしていたが、たまたま、首都パリから齎された政治的闘争のニュースによつて、彼等は興奮に醉されざるを得なかつた。若き彼等が懷抱していた理想郷の實現、共和制の建設のための闘争が日に増し猛烈に展開されて來るのを知つて、教室内に於けるありきたりの講義などは興味を引かなくなつた。彼等は學友とともに近郊に住居したが、神學の勉強よりは寧ろ當時の哲學者や社會學者の書を読む如く耽讀するに多くの時間を費やした。革命勃發の報が彼等に達するや、彼等は忽ち雷火に打たれし如く、全心の興奮に襲われ、醉えるが如く起ち上つた彼等學徒達は、演説するもの、拍手喝采するもの、ともに感激の坩堝に投ぜられたのであつた。そし

て現實の生活は學校の教授よりも遙かに教訓的になつた。ルクリュ兄弟は、學校を棄てて、一人の同志 (Edouard Grinard) とともに、徒歩でセヴェンヌ山岳地帯を越えて地中海地方へと赴いた。彼等の行動は學監に報ぜられた。右の如き自由な脱走に加うるに、更に彼等の言説が社會秩序を紊亂するものと認められたので、彼等は校長から停學の指令を受けるに至つた。

エリゼ・ルクリュはこの當時から既に相當に進歩した社會思想を懷抱していた。當時の手記中に次の如き一節がある（一九一三年二月八日發行、『Le Semeur』紙、エリイ及びエリゼ・ルクリュ號掲載、ジャツク・ムニルの感想文中に引用）

「われわれの叫びは、世界的共和制萬歳、ということである。この未來の共和制に於ては、ギリシヤ人も、フランス人と同様に權利を持ち、サモイエード人（ウラル・アルタイ種の一族（石川）もパリ人と同一集會に於て談論するであらう。國民的の惡み合いが消滅し、人間の區別をその祖國によつて立てるよりは、寧ろその思想によつて立てるようになることが看取されないか？ 今や世界に於ては、未來の人間と過去の人間との他になく、そしてこの廣大な兩陣營は、國語や人種の區別なく、各國に於て巨大な總連合を形成している。

要するに各國に於けるわれわれの政治的目標は、貴族の特權の絶止と全地球上に於ける總ての人民の融合ということである。

われわれの道標は、その理想的完成の域に達するにある。即ちそこに於ては、各國民はもはや、政府にもせよ、他の國にもせよ、何れの監督をも必要としないであろう。それは政府無きことであり、秩序ということの最高表現たるアナルシイである。

しかしながら、政治的自由ということは、社會的自由なしには、意味をなさない。この自由という語は、自分の汗を以て家族のために充分のパンを購入し得ないものや、自らなせる革命に於て新たな苦痛のために衰滅する労働者やにとつて、何の意味があるか？ 檻穽をまとい、餓死に瀕する人々の行う人民主權などということは全くの笑草ではないか？

社會主義が完全な實現に達するには、また、それが現實に人間社會の理想境たるには、個人の權利と全體の權利とを同時に警戒することを必要とする。人間社會の各員は、その同胞集團のために些かも妨げられることなしに、自分の才能と自分の方法とに従つて自由に發展すべきである。それと同時に各自の勞作を全體の幸福に利用すべきである。或る種の共產主義者等は、現在社會に對する反撥よりして、各人は集團内に没入せねばならぬ、そして暗礁上に蠢め

く珊瑚虫の無數の腕のようになるか、又は海中に滴落してやがて波濤となつて奔滔する水の零のようになるを要する、と考へようである。しかし、それは大へんな誤謬である。人間は偶在物ではなくて、自由な能動的な存在であり、しかも同胞互に混淆するのではなくて、自主的に結合するものである。」

以上はまだ二十歳に満たなかつたエリゼ・ルクリュエの文章である。時代の所産とは言いながら、まことに驚くべき早熟と言ふべきである。彼の腦裏には、既に無政府主義の理想がほぼ成立していたのである。モントーバンに於ける彼等三人は朝となく、夕となく、芝生の上に横わつて、オーケン (Oken) シェリング (Schelling) ルー (Leroux) ブルドン等を耽讀し研究したと言われるから、右のような思想の發達は寧ろ當然であつたとも言える。

彼等三人の學友の停學處分の結果、エリイはその研究を続けるために直ぐにストラスブールの大學に行くことに決し、エリゼはヌーヴィエドに教授として赴任することになった。(一八五〇年) 彼は非常な歡迎をそこで受け、同胞達からも非常に愛されたのであるが、間もなく自分の勉學の熱望に動かされて、その少年達と別れを惜みつつベルリンに赴いた。彼の両親は貧しい牧師で、もとより彼に學資を送る餘裕などはなかつたので、彼は自給自足の道を立てなくてはなら

なかつた。彼は學校内に小さなフランス語教授の廣告を出したところ、直ぐに二三の申込があつた。神學教授のヘルグステンベルヒという人は、多分父親の知人であつたであらうが、彼のために或る伯爵家の家庭教師の職を紹介してくれた。ところが『共和主義者でないこと』という條件がついていたので、彼は何の躊躇もなくお断りした。彼の生活は、彼の貧乏は、常人の堪えがたい極端のものであつた。彼の母親が、その赤貧の家計をやりくりして送つてくれた二百法の金は、途中で紛失されたか、彼の手には届かず、彼は月謝を拂うために靴まで賣り飛ばすに至つた。しかし彼は常に樂天的であつた。惻然な勞働者の仲間入りをして彼等と談ることが殊に樂しかつた。個人教授の生徒中にも愛すべき青年が現われて來た。

エリゼはベルリン大學に留學するに當り、最初は神學を勉強する積りであつたらしい。しかし彼の心の中には、その將來の爲事に就て、些か新しい希望が、小さな光明を添えて現われて來た。そして彼の氣質は、その家系的環境に盲目的に服従することができないようになって來た。それは一面に於て、新社會の出生の陣痛を惱んでいるフランス思想界の動搖に動かされたものであり、他面に於て、彼の知識慾を最も強烈に牽引した新しい學問をここで發見したのである。それは即ち地理學であつた。殊に人文地理學であつた。當時ベルリン大學で地理學を講じていた

學者は、即ちフムボルト (Humboldt) の競争者であつた有名なカール・リッテル (Carl Ritter) であつた。リッテル (一七七九—一八五九年) は人文地理學の大家で、既に一八二二年から、その大著『自然と人間史との關聯に於ける地理學』の出版を始めたが、不幸にして一八五九年に第二十卷を發行したのみで未完成に終つた。そして、それには、アメリカとヨーロッパとオセアニアの部が缺けていた。リッテルはこの書の中に、人と地、自然と歴史との相互關係の大體の法則を開示したのである。更にリッテルは地理學の教授法並びにその社會的重要性に就て、ペスタロツヂに負うところが少なくなかつたし、自然地理學に於てはカントに影響せられ、その歴史哲學に於ては少なからずヘルデルに感化せられたと言われる。このリッテルの思想と方法とは、深い印象をエリゼに與え、それは後日まで永續したのである。

前にも述べたように、彼は非常な貧困の中に學究生活を続け、或る時は燃料を購入することもできなくて、已むをえずベッドの中で勉強せねばならないこともあつた。聽講料を拂うことができないで、公式には講座から締めだされたのであるが、そのような事は素より彼の志を屈するに至らず、彼はこれを無視して講座に出席した。しかるに此の時分から故郷の兩親との間に將來の生活方法、殊に聖職問題に就ての討議が始まり、エリゼは非常な愛情的苦痛を抑えて、母親に牧

師となることを拒否する手紙を送っている。それは両親ともに彼等二人が牧師たらんことを希望していたためである。結婚問題も起つたのであるが、まだまだ其のようなことを考える時期ではないとして取り上げなかつた。エリゼがベルリンから母親に送つた一書の中に次のような文句がある

お母さん

(一八五一年四月、ベルリン發手翰)

前の手紙で、私の書きかたが甚だ拙劣であつたと見えて、お母さんは私の決定が牧師になるということだと御考えになつたようですね。私はたしかに學問の研究を続けると申しましたが、併しお母さん、それは聖職に身を献ずるためではありません。この一年間の私の中間的研究は、私の從來の躊躇に終止を與えました。そして私は、このことに關し、他の一切の問題に關すると同様に、只管私の良心の叫びにのみ聽従しようと、確く決定しました。どうして教職會議や、信者達が、福音宣傳の權能を私に授けることができるのか、私には考え及びません。どんな性質の祝聖式にもせよ、私は決してそれを受諾することは出来ません。なぜなら、私の考えるところでは、それは變裝せる曖昧な法皇主義に過ぎないからです。完全な自由の原理を承認する私としては、ただ神にのみ屬する心魂の上に、人の支配を許すことは、何としても出来

ないことです……」

エリゼの手紙はまだまだ頗る長い。以上は漸く全文の九分一にしか當らない。しかし、彼を牧師たらしめようとする両親の切なる希望を拒否するために、彼が如何に苦心したかは、これにて察することが出来るであらう。兄のエリイはストラスブル大學に提出した神學上の論文で『權威の原理』を検討し、いささかの護歩をも示さずに斷然これを否定したが、(ド・クレフ博士『Eloge d'Elie Reclus』一二頁) まだ両親に對して聖職拒否の宣言をするまでには至らなかつた。

右の如き種々な問題を控え、また久しく離れていた両親を見舞いたさもあつて、エリゼは一八五一年九月歸國のことを思い立つた。勿論ストラスブル大學にいた兄とも打合せてのことであらう。同市に於て兄と會い、それより二人で歸國の途に就いた。それは佛國東方の國境から西端のオルテに至る、眞の横斷徒歩旅行なのであつた。愛犬リジオを伴つて、或は美しい星を仰いで寝ね、或は放棄された人無き小屋に宿り、或は他の一般の旅人のような方法を探り、ただパンをかじりながら日々の旅を續けた。彼等が歩を運びながら、論議したり、觀察したり、又は反省したり、したことは勿論である。二十一日間の徒歩を以て、彼等はこの歡喜の旅を了えて一先ずモ

ントーバンに到着し、そこで數日を費やした後、更に彼等は父母のいるオルデにまで道を急いだ。